

現在、大学院生を中心とする若いフィールド研究者が、ナイル・エチオピア地域に住み込んで調査をつづけている。彼らがフィールドで何を考え、何をしているのかを飾りけなく語ってもらうフィールド便りは、毎号大きな反響を呼んでいる。そこで今回は、エチオピア南西部から北ケニアにかけての隣接する地域のフィールドワークから帰ったばかりの三人の若手研究者に、フィールド便りの競演をお願いすることにした。

## 生業経済とフード・インセキュリティ

増田 研

エチオピアにおける1984年から85年にかけての大旱魃とそれに起因する飢餓、そして膨大な数に上る難民の発生は、テレビ映像などを通して世界中に強烈な印象を与えた。それらはまた同時に、様々な関係諸機関の活動を促し、緊急援助が声高に訴えられ、タレントや歌手といった人々をも巻き込んだムーブメントとして私たちの記憶に残っている。もはやエチオピアは、大勢の人々が食べ物を求めてさまよう貧しい国の代表格となってしまった感がある。

もちろん飢餓のひとつをもってエチオピアのすべてを語りきることは不可能である。しかしながら実際のところ、エチオピアでは毎年どこかで食糧不安が生じており、食糧援助が必要であるとの指摘がなされている。たとえば1999年9月23日付のUSAID報告によれば、この時点で530万人が食糧援助を必要とし、国連は総額で750万ドルを対エチオピア援助に費やすとアピールを採択している。このような報告は、1998年にも、その前の年にも見受けられ、食糧不足は慢性化しているといってもあながち間違いではない<sup>1)</sup>。

ここで私は自分のフィールドが食糧不足に見まわれた顛末について書こうと思う。私が示したいのは、食糧援助を含めた環境の変化を、かれらが日常生活に取り込んでゆく努力の過程だけである。それはフィールドワークを研究の原点とする社会人類学者として、人類学的に書くということこそが、まず第一になされねばならないと考えるからである。そ

れをせずに私にいったいどんなアクションが起こせるだろう？

### 1999年、南部

私は1993年、1998年、1999年と3回にわたってエチオピアに滞在した<sup>2)</sup>。滞在期間はあわせて2年2ヶ月である。フィールドは南西部、南オモ地域のバンナという農牧民社会である。その三回ともバンナでは穀物の収穫量が少なかった。最初の滞在時には乾季の間、人々が様々な手段を駆使して穀物の確保に奔走していたことが印象に残り、これをきっかけとして彼らのマーケット活動に関する報告を書いた<sup>3)</sup>。

1998年には、すくなくとも私の目には実りは豊かであると映り、収穫期（6月から8月）には目の前でとれたばかりのイモやトウモロコシを腹一杯食べることができた。それでも乾季（およそ9月から2月まで）の間は自前の収穫だけではやっていけず、マーケットで購入したりして食いつないだと後になって聞かされた。先の論考のなかで私は、バンナの経済が乾季の食糧不足を、他地域との収穫期のずれを計算に入れてしのいでいると結論したが、その見立ては間違っていなかったのである。

さて1999年の事態は非常に深刻である。先のUSAIDの報告では、南オモ地域は「問題なし」として処理されていたが、私が到着するなり目にしたのは、2メートル近くまで茎を伸ばしながら、茶色く立ち枯れてしまったトウモロコシ畑であった。私が

住み込み調査をしてきたポリ村では、ほぼ全戸でモロコシ、トウモロコシが一粒も穫れなかった。バナナで活動するキリスト教ミッションSIMによると、過去一年以上、降雨量は例年の平均の半分にも満たなかったという。<sup>41</sup>

Pei katsi daaqi di ni 「国(=バナナの国)はとても飢えている。」今回の滞在中、よく耳にした言葉である。

### 食糧援助・開始

そうした中、カナダから送られた小麦を配るプロジェクトが開始された。これは中央政府から地方行政政府を経由して配分されたもので、8月中旬からの総配給量はバナナ、ハマル、ツァマイ、アルボレを対象に1200トンに上るといふ(バナナ=ハマル行政区の担当官の話)。雨期のはじめ頃はバナナにも雨が降り穀類の生育もよかったため、バナナは援助の対象から外されていたというが、その後の雨が続き、ほぼ全滅に近い状態になってしまったため急速方針を変更したという。

この援助プロジェクトでは、各世帯から一人ないし二人を道路工事などの作業に従事させ、10日間のプログラムを終えた後に一人当たり30キロの小麦を配給することにしていた。ほとんどの場合で世帯主が名前を登録していたが、世帯主本人のかわりに子どもが代理で仕事をしに行くことも多かった。

食糧援助は登録、作業への従事、小麦の配給という三つの段階から成る。ここでは私が実際に観察した8月のプログラムを紹介しよう。

ポリ村とそれに隣接するビレ、シャンガラ、トゥルンゴの村々では8月12日に登録が行われた。四つの村をあわせてちょうど1000人が登録し、総計30トンの小麦が配られた。それぞれの村がチームとなって、政府から任命された記録係の青年たち(学校教育を受けてアムハラ語の読み書きと計算ができる者)が監督役を担う。この登録作業というのは、人々にとって初めてでないとはいえずはり馴染みのないものらしく、たとえ

食料援助の登録を待つひとびとひとびと。

ば列を作って並ぶという所作や、名前を文字で記入されるということに対して、居心地の悪さを感じているようであった。この登録の日を守らなかった人は、後日1ブル(これは賄賂とも手数料ともとれる)を払って、追加登録してもらっていた。

### 道路工事と小麦の配給

翌13日より作業が始まった。このときの作業プログラムは大きく二つに分けられる。ひとつは定番ともいえる道路工事で、古くなった自動車道を捨て、新しい道を開くためにブッシュを切り開いたり、あるいは路面を均したりする仕事である。このあたりの自動車道はもちろんアスファルト舗装などされていないので、2~3年たつと道のあちこちに穴があく。この穴に小石を敷き詰め、土をかぶせて均すのである。作業は石を捨てる者、地面を削る者(主に若い男性)、その土を運ぶ者、土塊をつぶして均す者(老人たち)などに分かれて行う。道路が河床を横切るところでは、砂地のうえに石を並べたりもする。

もうひとつの作業は、この道路沿いに政府が所有する家屋を建設するもので、これには普段建物を作りなれている成人男性が携わった。彼らはノルマとして一日に建材三本を切り出すことを課され、それらがそろった時点で棟上げ、屋根葺きなどを行った。この建物はその後、ポリ村に派遣された統計局の調査員が住居として使っている。

作業に従事する人たちは毎朝だいたい8時頃までには集合し、それぞれの仕事場へ向かう。それぞれ



の割り当てられた仕事内容に応じて、掘り棒や手斧などを持参する。作業は午後2時まで続けられ、出欠の確認をとってから解散する。監督係以外に腕時計を持つ者はいない。そもそも時刻に合わせて行動するという習慣がないため、人々の集合時間はまちまちである。また作業中に道ばたに座って話し込んだり、頻繁に手を休めるといったこともおおく、監督の青年はかなりのフラストレーションを感じていたようだ。

作業をみていて思うのは、ここでは労働の成績は一切問われないということである。政府の担当官が工事のでき具合について感想をもらすことはあっても、その善し悪しが配給量を決める基準にはならない。必要なのは決められた日数分の出席が記録されていることである。作業日数の不足分は一日1ブル、あるいは二日で1ブルといった具合に記録係に支払うことで補うことができた。つまり極端に言えば、数ブルの現金を所有さえしていれば、作業に従事していなくても30キロの小麦を受け取ることは可能だったわけである。

9月1日、ポリ村を含む近隣4ヶ村の小麦の配給が行われた。1000人分、総計30トンもの小麦である。アルドゥバというところで、ポリ村からは8キロほどの道のりである。この日、ほとんどの人が早朝からアルドゥバに向かい、夕方にはロバに荷を背負わせ、あるいは自ら肩に背負って援助小麦を持ち帰った。

## 現金と酒

小麦はもともとバナナの食品アイテムではないが、過去に何度か行われた援助の配給によって、モロコシやトモロコシの代用品としての地位を確実に築き上げている。しかし配給の直後のマーケットではこの小麦を売る人々の姿がみられ、彼らはその売上金を用いてモロコシを買ったり、あるいは酒を飲んだりしている。

この年はポリ周辺だけでもほかに二つの政府系のプロジェクトがあった。一方は巨大貯水池の造成であり、他方は牧場建設プロジェクトである。これまでも貯水池を作る事業はあったが、それらはいずれもキリスト教ミッションのものであった。この貯水池プロジェクトはポリの近くにそびえるツイヨ山のおもとに野球場ほどもある穴を掘り、地下から汲み上げた水を貯め、近隣の人々が自由に利用できるよ

うにするというものである。家畜への給水ができるような設備も整えられる。牧場の方は、政府がバナナのウシを数千頭規模で買い上げ、それを飼育して市場に売却するというものである。そのために2000ヘクタールという広大な土地が政府によって囲い込まれた。

道路工事と並行して、バナナの男たちはこれらのプロジェクトに雇われ、材木の切り出し作業などに従事して一日5ブルの現金を得ていた。これらはごくテンポラリーな仕事ではあったが、彼らにとって貴重な現金収入であった。気になったのは、こうして得た現金のほとんどを、男たちが酒につき込んでしまうことであった。ポリ村には蜂蜜酒 zia (バナナ製) と蒸留酒 arak (町で仕入れてきたもの) を飲ませる家がそれぞれ一軒づつあり、給料の配達を受けたそばから酒に浸ってしまうのだ。

Eedi Banya, koimo apidi anna, uucha bish.  
「バナナは金を手にしたら飲むばかり」 ある少年は、父親が酒ばかり飲んでいるのを見て、こう言った。

今回の調査で印象に残ったことの一つに、バナナの人々の現金経済化がゆっくりに着実に進行していることが挙げられる。かつて村の中で現金を用いて取引されるものは蒸留酒と銃弾の二つだけであった。これらはどちらも外部の世界から持ち込まれた品々である。それに比べて現在、コーヒーやバターといったものも村内で売買されるようになってきている。たしかにどちらもマーケットで現金によって取引される類の品であり、現金でやりとりすることへの心理的抵抗も少ないといえようが、そのうちにそのほかの品々まで現金でやりとりされるようになるのであろうか。

## マーケット

食糧援助では一回当たり30キロの小麦が配られたが、彼らの食事のスタイルからすれば焼け石に水でしかない。彼らの食卓は粉に挽いて炊いた穀物と牛乳の組み合わせであり、一回の食事で消費する穀物の量は大変多い。一夫多妻の家族であれば、30キロの小麦など10日からせいぜい2週間で尽きてしまうだろう。

この時期、人々が穀物を入手するために力を注いでいたのはむしろマーケットでの購買である。そうした全体的な経済活動の中では、食糧援助の果たす

役割は非常に小さい。

ボリ村の人々が通常利用するマーケットはカイ・アファールおよびディメカという二つの町で、どちらもボリ村からは30km以上の道のりである。ここで彼らはウシやヤギといった家畜、森から採取したハチミツ、あるいは自家製のバターを売りさばき、それを元手として穀物を購入する。

こうしたマーケットの動向として近年注目されるのは家畜の価格の急激な下落である<sup>9)</sup>。1993年には一頭あたり700ブルから1000ブルで取引されていたウシは、1999年には平均200ブル、大きな去勢ウシでも400ブルそこそこで買い取られていた。ヤギについても1993年に150ブル程度だったのが、1999年には20ブルから30ブルにまで下落している。これはマーケットにおける供給過剰と、雨不足、牧草不足によってほとんどのウシがやせ細ってしまったことによる。

このときの穀物は、山岳農耕民アリ方面での実りが豊かだったこともあり、さほど値上がりせず、おおむね1キロあたり1ブルで取引されていた。したがって大きめのヤギ一頭を売れば、30キロのトウモロコシが入手できる計算になる。ただし上述したように、家畜を売って得た現金のうち幾分かは酒代として消えてしまう。

バナナの場合、その年の収穫がゼロであっても、マーケットに売却するモノのストックがあれば当面の飢えはしのぐことができる。しかし状況は決して楽観視できない。第一に家畜の価格は下落している。第二に、搾乳量が減少したために、バターがあまりできなかった。第三に雨不足から花が咲かず、ハチミツの採取量が極端に少なかった。バナナ語でコーティと呼ばれる巣箱を開けても、巣があるだけで蜜はほとんどない。

どこの世帯でも、いつも一人はどこかのマーケットに出かけていた。売るための品物を持参し、町に到着し、売り買いの交渉をして家路につくまで、場合によっては5日あまりもの日数を要する。それだけの日数をかけても、入手した穀物はせいぜい2~3週間で尽きてしまう。そこでまた出かける。この繰り返しである。

#### ムーダする

穀物がないという事態に際し、バナナの人々が食糧援助やマーケットをどう利用してきたかを簡単に

述べた。以下、いくつかの印象と展望を記したいと思う。

食糧援助を人々による労働提供という視点から見ると、これは一種の公共事業であるということが出来る。どれも短期間の契約労働であり、それに対して報酬を支払うことで道路というインフラの整備がなされるのである。報酬はカナダから無償で与えられる小麦であり、この事業でエチオピア政府は腹を痛めないですむ。国が飢えれば公共事業がすすむという、これは皮肉である。

食糧援助そのものはかれらの穀物確保のひとつの手段としてすでに定着した感がある。バナナの南に同じ言語を話すバシャダという集団があるが、そこで私は1999年に収穫されたモロコシの山を目撃した。バシャダでは比較的実りがあったのである。その畑の主はそのモロコシが写真に撮られることを嫌がった。なぜなら収穫があったことが発覚すれば、食糧援助はストップされるからである。

地域経済という観点からすれば、この飢饉のおかげで商人たちの懐は大変潤っているはずだ。彼らが買い付けるウシの値段は安く、しかも穀物は確実に売れる。笑いが止まらない。

村での生活を眺めれば、女性たちの労働負担が増加した。たとえば道路工事で夫の名前を登録しても、実際に働いているのは妻や娘であることが多い。女性たちは午後まで働いて、息つく暇もなく水汲みや食事の仕度に取りかかるのである。ボリ村ではほとんどの世帯で枯れ川の河床を掘って水を汲んでいたが、雨が少なかったために砂地を深く、時には1メートル以上掘らないと水がでてこなかった。食事の支度にも時間がかかるので、夕方にならないと食事がとれないという世帯がいくつもあった。

9月の時点で人々は小雨期の雨を期待していた。この時期、年によってはまとまった雨が降り、モロコシのひこばえが成長する。しかし11月にはその望みも捨ててしまったようである。相変わらず家畜のストックを削りながらマーケットめぐりをし、男たちは酒を飲んでいた。

バナナ語でよその穀物を入手することをムーダというが、彼らによればこうして「ムーダする」のはこれで三年目だという。このムーダする状況は次の年、すなわち西暦2000年の収穫期である7月頃まで続く。前述のようにバナナの食糧はいま家畜のストックという貯金を取り崩すことによって維持され

ている。もしムードするような事態が四年目に突入り、貯金を食い尽くすようになったときには、バナナが難民化する事態すら考えるわけである。彼らの生活スタイルのなかから、こうしたフード・インセキュリティを改善する手だてを導き出す手がかりを探ることも、私の人類学者としての仕事のなかに含まれるのではないかと、いま思っている。

[注]

- 1) これに関しては多くの文書がインターネット上で公開されている。ここで参照したのはその一例にすぎない。Ethiopia - Border Conflict/Drought. Fact Sheet #2, September 23, 1999 <[http://198.76.84.1/ofda/ethiopia\\_fs2.html](http://198.76.84.1/ofda/ethiopia_fs2.html)>
- 2) 1993年の調査は文部省科学研究費助成金による国際学術研究「北東アフリカにおける民族の相克と

生成に関する実証的研究」、1998年と1999年の調査は同「民族と国家/地方と中央における動態的關係：北東アフリカ諸社会の再編成の比較研究」（代表：福井勝義京都大学教授）によって行われた。

3) 増田研 1995 「エチオピア西南部オモ系農牧民バナナのマーケット活動」『スワヒリ&アフリカ研究』6: 83-101

4) Christian Veterinary Mission の Dr. Fred Van Gorkom 氏よりご教示いただいた。

5) 調査時点（1999年夏）で1ドルあたり約8ブル強である。円＝ドルレートを1ドル＝120円と仮定すれば、1エチオピアブルは約15円となる。

（ますだ けん

神奈川大学日本常民文化研究所研究員）



水煙草を吸うマジャンギャルの男。  
（写真提供：佐藤廉也氏、京都大学）